【別紙２】

論文名：**Changes in nutritional status of patients with jaw deformities after orthognathic surgery**

（要約）

新潟大学大学院医歯学総合研究科　組織再建口腔外科学分野
氏名　稲葉　好則

ここから記入

本研究では、顎変形症患者における顎矯正手術後の栄養状態の変化を検討した。対象は当科で顎矯正手術を行った顎変形症患者 155 名（男性 40 人と女性 115 人）とし、平均年齢は 24 歳（16-52 歳）であった。施行された術式は両側下顎枝矢状分割法単独、Le Fort I 型骨切り術と両側下顎枝矢状分割法の併用、多分割 Le Fort I 型骨切り術と両側下顎枝矢状分割法の併用のいずれかであった。対象はすべて術後、14 日間の顎間固定を施行し、術後翌日より総摂取量が 1600kcal 以上に調整された流動食を経口から摂取していた。栄養状態の評価は、術直前と術後 10 日目の体重と、術直前、術後 1 週、術後 6 か月以上経過時のヘモグロビン、リンパ球数、血清アルブミン、総コレステロール、コリンエステラーゼの臨床検査結果および CONUT（controlling nutritional status）スコアを用いて評価した。対象を術式別、食事摂取量、および術前 BMI でそれぞれ 3 群分類して術後の栄養状態の変化について検討した。その結果、血清アルブミンを除いて、すべての検査項目が術後有意な変化を示し、術後 6 か月以上経過時には術前の値と有意差を認めなかったことが明らかとなった。食事摂取量による分類では、食事摂取量の減少とともに CONUT スコアは増加していた。 また、食事摂取不良群では手術後 6 か月以上経過しても血清アルブミンは術前の値まで回復していなかった。一方、肥満評価基準による分類においては、コリンエステラーゼを除いて、検査値および CONUT スコアの変化に有意な差を認めなかった。

本研究では、血漿タンパク質ならびに脂質を用いた栄養評価指標で顎変形症患者の栄養状態の変化を検討した。その結果より、顎変形症患者の栄養状態において、顎矯正手術の影響はさほど大きくはないが、術式が複雑になればなれなるほど、患者の栄養状態の悪化につながる可能性があった。以上より、顎変形症患者の周術期のおける栄養管理は、術後、早期の回復を促すための重要な要因の 1 つと考えられた。